

佳作

お母さんとわたしのゆかた

鹿児島県 鹿児島市立広木小学校四年 大川 千智

「大きくなったんだね。」
と、お母さんがわたしのゆかたすがたを見て言いました。

今年の夏は、三年ぶりに家の近くのお寺で夏祭りが開きいされることになったので、わたしはゆかたを着ようと思ひ、

「お母さん、わたしのゆかたどこにある。」
と、たずねました。お母さんが出してくれたゆかたは、わたしが一年生の時に着ていたゆかたで、三年前は大きかったのですが、今年は少しだけ小さくなっていました。

わたしは、新しくゆかたを買ってもらうことになり、次の日、お母さんといっしょにお店へでかけました。お店には、赤いまりの模様や水色やピンクの花の模様など、たくさんゆかたがならんでいま

した。

「このゆかた、かわいいよ。」
と、お母さんがわたしのせただけに合うゆかたをいくつか見せてくれました。

「かわいいね。どの色にしようかな。」

と、お母さんに答えながらも、わたしの心の中では、もうすでに黒と決まっていました。けれど、わたしが着たかった黒色のゆかたはありませんでした。すると、お母さんが、

「気に入ったのがなかったら、お母さんが子どものころに着ていたのがあるから、それを着たらいいよ。」

と、言いました。でも、わたしはお母さんの古いゆかたを着たくなかったので、

「え、それは、いやだ。」

と、ことわりました。しかし、お店をいくつ回っても、気に入ったゆかたが見つからず、その日は何も買わずに家へ帰りました。

家へ帰ると、お母さんが古いゆかたを見せてくれました。

「これ、着てみてよ。」

と、わたしにさし出したゆかたが、なんと、わたし

が心の中で思っていた黒色のゆかただったのです。お母さんの古いゆかたは、カラフルなアゲハちょうがたくさんえがかれたかわいいゆかたでした。

「あ、わたしこのゆかたがいい。」

と、わたしが言うとお母さんがその日の夜すぐにわたしのせただけに合わせてあげをしてくれました。

次の日、あげをしてもらったゆかたにそでを通すと、わたしのサイズにぴったりでした。お母さんが子どものころに着ていたゆかたを着ているなんて、なんだかふしぎな気持ちでした。でも、おばあちゃんがかうれしそうな表じようで、

「かわいいね。三十年前のゆかただけど、大切にのこしておいてよかった。ちいちゃんが着てくれる日がくるなんて思ってもいなかったよ。」

と、言ってくれたので、わたしもうれしい気持ちになりました。これからも、お母さんからもらったゆかたを大事にしたいです。